

26	京都教育大学附属京都小中学校	H30~R4
----	----------------	--------

令和4年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

義務教育9年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発

- (1) 義務教育9年間で育てるべき資質・能力の検討と改善
- (2) 発達の段階に応じた各教科における学習の目標と内容の検討及び再構築

2 研究開発の概要

義務教育9か年で育てたい生徒像を「未来に躍動する生徒」とし、解決困難な課題に直面しようともあきらめることなく、乗り越えることができる生徒の育成を目指した研究に取り組んでいる。

具体的には、これまでの研究実績や義務教育学校の特性を活かして、教科間の学習内容の重複、効果的な繋がりや検証を行い、各教科の内容を精選・削減・統合するなどして、発達の段階に合った9年間の連続性のある各教科の教育課程の構築を目指すこととした。その例として、1年生からの英語科、6年生と7年生の歴史探究、3年生からの技術科と家庭科など、新たな取り組みを行っている。また、学年と教科の枠を超えた資質・能力ベースのカリキュラム構築のために、生活科と総合的な学習の時間を資質・能力を活かす場として位置づけ、生徒たちが今日的な課題を自らの力で解決し乗り越えていくことができる場面設定をし、解決困難な今日的な課題と向き合った活動を目指している。

3 研究開発の経緯

第1年次	<p>① 教育課程について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育てたい資質・能力を各教科の特性に応じて絞り込んだ。 ・各教科の学習目標と学習内容について、発達の段階と対応させて検討し、義務教育9年間の系統性における課題を見つけた。 ・各教科において義務教育9年間の学習内容の精選を行い、教科を超えた学習内容の移動や統合、教科内で厚みを持たせたり削減を行ったりする内容を絞り込んだ。 ・義務教育9年間の学習内容について、発達の段階に応じた教育課程案を作成した。 <p>これまでに先行して研究を行っている理科、技術・家庭科及び実施可能な教科については、初年度より新しい教育課程案に基づく指導を実施し、その課題等を検討した。</p> <p>② 評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三つの資質・能力を評価するための評価方法について検討し、年度末を目途に評価方法を提案した。 <p>③ 思考力を基盤とした資質・能力を育成するための指導法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校がこれまで取り組んでいる「考えるプロセス」を基に、「自己調整学習」の理論を取り入れ、各教科において思考力を基盤とした資質・能力を育成するための授業モデルを検討した。 ・教科横断的な学習内容について、異教科の教員によるTT指導や教材の共有による思考力を基盤とした資質・能力を育成するための指導法を検討した。 ・本校の研究協議会において公開授業を行い、研究成果を全国へ発信するとともに、研究内容に対する意見や情報を収集し、次年度の研究に活かした。
第2年次	<p>① 教育課程について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義務教育9年間の新たな教育課程を実施し、その課題等を検討しながら教育課程の修正すべき点を探った。コロナ禍の影響を受け、小学校第3学年より取り入れていた家庭科の食育を中心とした教育課程を実施することが困難となり、衣服や家庭生活を取り入れた教育課程を検討、実施した。また、技術科において、図画工作の工作分野と技術科の木工分野の統合を試みたが、スキル面での統合は可能であった。

	<p>が、資質・能力ベースでは教科の特性から困難であることが明らかとなった。</p> <p>② 評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つの柱の1つとなっている「学びに向かう力、人間性等」については4月にアンケート調査を全校生徒に対して行った。 ・「思考力、判断力、表現力等」についてはその都度、各授業・領域においてキーワードマッピング等により変容を捉え、最終的にはルーブリックによる評価につなげた。 ・「知識及び技能等」については全国学力・学習状況調査、学力推移調査、TOFEL等を活用して評価を行った。 <p>③ 主体的な学びを促す教材・指導法の開発について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科において主体的な学びを促す指導法を取り入れた授業実践に取り組んだ。 ・主体的な学びを促す教材開発に各教科で取り組みその効果を検証した。 ・本校の研究協議会において公開授業を行い、研究成果を全国へ発信するとともに、研究内容に対する意見や情報を収集し、次年度の研究に活かした。
第3年次	<p>① 教育課程について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義務教育9年間の新たな教育課程を実施し、その課題等を検討しながら教育課程の修正すべき点を探る。特にスパイラルカリキュラムの視点で、育てたい資質・能力と学習内容のつながりを明確化した。この中で、小学校第6学年と中学校第1学年の社会科の歴史分野において、歴史入門・歴史探究という形の教育課程が望ましいことが明らかとなり、地理分野においても同様の教育課程の可能性を明らかにした。 <p>② 評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つの柱の1つとなっている「学びに向かう力、人間性等」については4月にアンケート調査を全校生徒に対して行う。また教師の意識調査も同時に行い、これらのアンケートはカリキュラム・マネジメントの評価として使用した。 ・「思考力、判断力、表現力等」についてはその都度、各授業・領域においてキーワードマッピング等により変容を捉え、最終的にはルーブリックによる評価につなげる。これらは生徒の個別の変容や指導法の評価として使用した。 ・「知識及び技能等」については全国学力・学習状況調査、学力推移調査、TOFEL等を活用して評価を行う。これらは他校との比較に用いたり、カリキュラム・マネジメントの評価に用いたりした。 <p>③ 主体的な学びを促す教材・指導法の開発について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科において主体的な学びを促す指導法を取り入れた授業実践に取り組んだ。 ・主体的な学びを促す教材開発に各教科で取り組み、その効果を検証した。 ・本校の研究協議会において公開授業を行い、研究成果を全国へ発信するとともに、研究内容に対する意見や情報を収集し、次年度の研究に活かした。
第4年次	<p>① 教育課程について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・義務教育9年間の新たな教育課程を実施し、その課題等を検討しながら教育課程の修正すべき点を探った。その中で、各教科で育てた資質・能力を複合的に活かす場の設定が必要であると考え、生活科と総合的な学習の時間を資質・能力を複合的に活かす場と位置付け、系統的な課題設定を試みた。 <p>② 評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3つの柱の1つとなっている「学びに向かう力、人間性等」については11月にアンケート調査を全校生徒に対して行った。 ・「思考力、判断力、表現力等」についてはその都度、各授業・領域においてキーワードマッピング等により変容を捉える取り組みを行った。 ・「知識及び技能等」については全国学力・学習状況調査、学力推移調査、TOFEL等を活用して評価を行った。 <p>③ 主体的な学びを促す教材・指導法の開発について</p>

- ・各教科において主体的な学びを促す指導法を取り入れた授業実践に取り組んだ。
- ・主体的な学びを促す教材開発に各教科で取り組み、その効果を検証した。
- ・本校の研究協議会において公開授業を行い、4年間の研究成果を全国へ発信した。

4 研究開発の内容

(1) 研究仮説

本校生徒に目を向けると、教師の目線・教師の肌感覚ではあるが、2020年の全教員に対する学校SWOT分析において、多くの教員から「友達と協力しながら、楽しく活動できる」という生徒の姿が指摘されたことから、仲間と協働的に活動できる素地を持ち合わせていることがわかる。つまり、素直で前向きに物事に取り組んだり仲間と協力して課題を解決したりすることはでき、課題解決能力とその素地は持ち合わせていると思われる。しかしながら、2019年の9年生86名に対する学力推移調査(ベネッセ)において、「教科の学習で一番やりがいを感じるとき」について、「身につけた知識が将来役に立つと思うとき:4.7%」、「学習内容が身につけていると思うとき:15.1%」、「成績が伸びているとき:47.7%」、「おもしろい、楽しいと思うとき:25.6%」、「やりがい

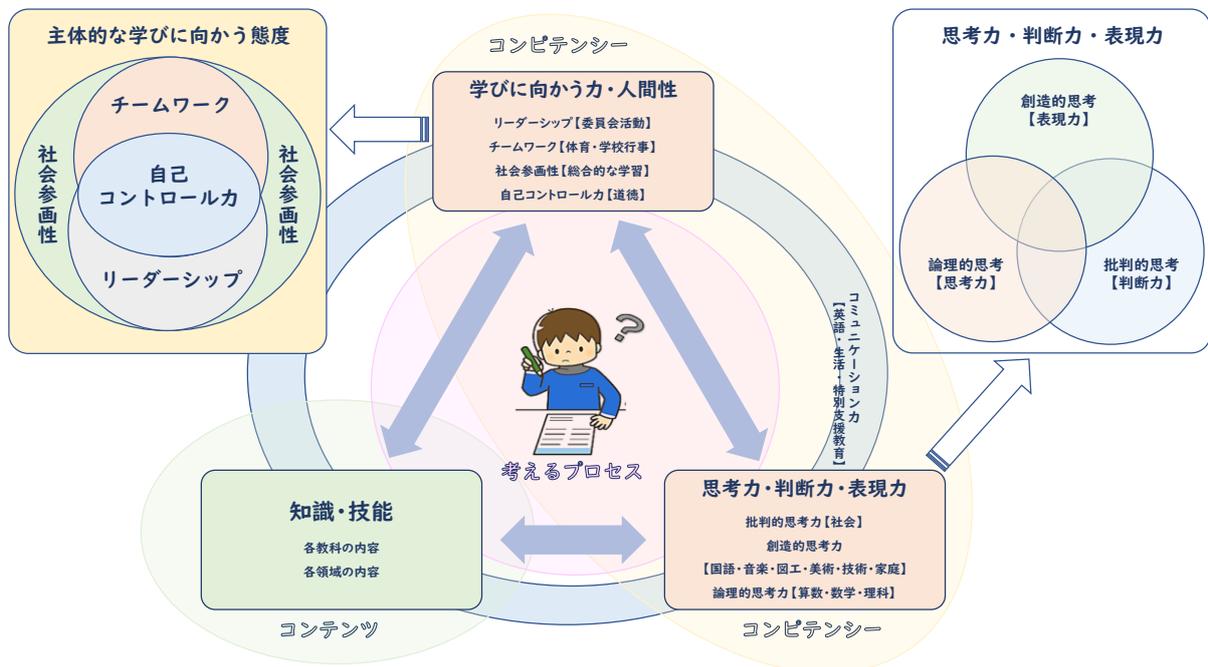


図1 本研究における新学習指導要領の捉え方

を感じることはない:7.0%」と答えた。このことから、教科の学習に対する生徒の意識が目先の成績や楽しさだけに向いていて、本来身につけるべき資質・能力に意識が向いていないことがわかる。したがって、現実社会にある課題を自分事として捉え、課題を解決するために自ら考えて行動にしたり粘り強くやり抜いたりしていこうとする力が足りない生徒が多いように感じる。

そこで、本校において義務教育9か年で育てたい生徒像を「未来の社会に躍動する人材」とし、下記に示す具体的な生徒の姿を目指して、図1のように生徒の育成を行っている。

本研究においては、これまでの「思考力、判断力、表現力等」を育成する指導方法だけでなく、新たな研究として「主体的に学びに向かう力」を育むことができるように、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成することを目指した指導法も開発していく必要があると考え、以下のような研究仮説を設定した。

【仮説1】資質・能力ベースの義務教育カリキュラムの構築【図2】

これからの時代を生きる生徒たちに求められる三つの資質・能力を明確にした上で、各教科等の特性や児童生徒の発達の段階を踏まえつつ、9年間を見通して教育内容の精選、削減、統合(教科の枠を超えた内容を含む。)を図り、コンテンツベースではなく、資質・能力ベースで効果的指導が行える教育課程編成することで、獲得した知識・技能を未知な状況に適用したり、仲間と協働的に活動しようとしたりする生徒の育成につながるのではないか。

【仮説2】資質・能力を効果的に育成できる学びの開発

限られた指導時間の中で資質・能力を効果的に育成するためには、各教科の特性(見方・考え方)を働かせた深い学びが不可欠であり、本校が提案する資質・能力の育成や主体的な学び「考えるプロセス」を取り入れれば、発達の段階に応じたスパイラルな学びの連続性が保障されたり、教科を超えた学びによって「点を繋ぐ」能力を育まれたりして、新たな価値を創造できる生徒の育成につながるのではないかと考えられる。

(ア) 本校が提案するカリキュラム・マネジメントの方法【図3】と教育課程表【表3】

(a) 求められる資質・能力の明確化

本校ではこれまで、教科ごとに、特に重視すべき資質・能力や目指す生徒像の明確化に取り組んできた。この中で本校生徒の学習に対する意欲は全般的に高いことが明らかとなっているが、学年が高くなるに従い「自己効力感」は低下し、それと共に内発的動機づけも低下していく傾向が見られている。そこで、本校で育てたい生徒像に必要な資質・能力を、図3に示すように構造的に考え、各教科・領域の本質に応じた指導ができるようになる必要がある。

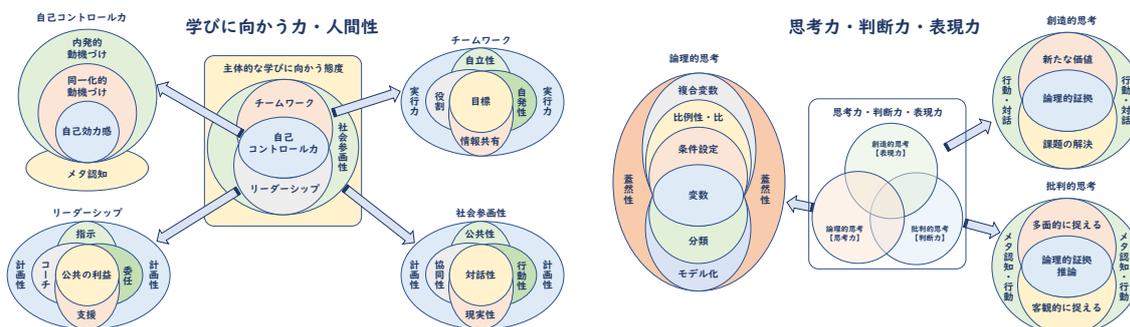


図2 本研究における資質・能力の捉え方

そこで「学びに向かう力・人間性」については、「主体的な学びに向かう態度」の育成が重要であると考えられ、「OECD FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS 2030」において「変革を起こす力のあるコンピテンシー」として挙げられている「認知的スキルやメタ認知スキル、批判的思考力、創造的思考力、ラーニング・トゥ・ラーン、自己調整、社会的及び情意的スキル(例えば、共感、自己効力感、協働性)」を参考にすることとした。その上で、本校が育てたい生徒像である「自ら学び、自ら考え、自律的に行動できる生徒」、「様々な考えや文化を受け入れ、他と共生し、協調して行動できる生徒」、「自他の個性を生かしつつ、目的を達成できるよう自ら実践できる生徒」について、表1のように本校が提案する資質・能力と目指す生徒像を再検討し、初等部(1年生から4年生)、中等部(5年生から7年生)、高等部(8年生から9年生)のそれぞれ発達の段階に応じた生徒像として表1に具体的に示すこととした。

表1 本校が提案する資質・能力と目指す生徒像

資質・能力	目指す生徒像	初等部の生徒像	中等部の生徒像	高等部の生徒像
学びに向かう力・人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の意見を受け入れ、円滑に集団を導こうとする生徒(リーダーシップ) ・謙虚な姿勢で周囲と協調して取り組もうとする生徒(チームワーク) ・様々な人や集団、社会と関わり、つながろうとする生徒(社会参画性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や仲間と協力して活動を行おうとしている。 ・困っている人がいないかを確かめ、楽し活動しようとしている。 ・リーダーの指示を聞こうとしている。 ・ルールを守り、仲間と協力しようとしている。 ・身近なことに興味をもち、積極的に関わろうとしている。 ・班や当番活動などで、自分ができることをやろうとしている。 ・出来たこと出来なかったことを振り返ろうとしている。 ・いくつかの方法の中で、自分に合った方法を考え、行動しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的を達成するために見通しをもち、仲間の意見を聞きながら行動しようとしている。 ・学習集団として意識を高められるような雰囲気をつくり、気持ちよく活動できる場づくりをしようとしている。 ・自分ができることを考え、積極的に活動に参加しようとしている。 ・仲間のために役に立とうとしている。 ・学校や学年、学友会に興味をもち、積極的に活動に参加しようとしている。 ・与えられた役割に責任をもって取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームの意識を高めるために、仲間の意見を聞き入れ、適切な指示を出している。 ・構成の個性を大切に、円滑な活動ができるようになっている。 ・リーダーの意思を考え、自分の役割を考え行動しようとしている。 ・目的達成のため、集団に貢献しようとしている。 ・学校や社会のさまざまな事柄に興味をもち、自ら参加し、行動しようとしている。 ・社会全体への効果も考え、社会的な活動に積極的に取り組み、社会に貢献しようとしている。 ・活動の過程を振り返り、具体的な課題や問題を把握し、次への活動につなげようとしている。 ・さまざまな視点から考え直し、新しい問いを立て、行動に移そうとしている。
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・物事を様々な角度から捉え、評価・判断することができる生徒(批判的思考力) ・新しいものの見方や考え方を導き出すことができる生徒(創造的思考力) ・事象を客観的に分析し、結果に至るまでの論拠を、進路を立てて説明できる生徒(論理的思考力) ・様々な考えや価値観をもった人とコミュニケーションをはかることができる生徒(コミュニケーション力) 	<ul style="list-style-type: none"> ・物事を1つだけでなく、2つ以上の視点で読み取り捉えようとしている。 ・1つの事象から多くのものの見方や考え方を導き出そうとしている。 ・根拠となる情報を見つけ出し、それをもとに自分の意見を伝えようとしている。 ・相手の考えを聞き、同じと違いを聞き分けようとしている。 ・自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・物事を複数の視点から捉え、評価・判断しようとしている。 ・出し合った考えをもとに、それらを検討しながら、新しいものの見方や考え方を導き出そうとしている。 ・複数の情報を取捨選択して、客観的なデータを提示しながら、自分の考えを説明しようとしている。 ・相手の気持ちや状況を考え、相手の意見を受け入れようとしている。 ・自分の考えを伝えたり、相手の意見を受け入れたらしなら話し合おうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・常識や固定観念にとらわれず、新たな発想や着想を尊重し、新しいものの見方や考え方を導き出そうとしている。 ・さまざまな事象を整理して、相手の立場や状況を正確に判断し、客観的な根拠をもって説明しようとしている。 ・状況や場面、立場を考慮し、他者の思いを尊重しようとしている。 ・自分の考えを主張したり、他者の意思を受け入れたらしなら話し合おうとしている。

(b) 効果的・効率的指導が行える教育課程の編成【スパイラルカリキュラム】

図3のように理科や外国語に関するこれまでの研究成果を生かし、全教科・領域について下記の①～⑥という流れで全教科・領域について教育課程を編成する。

- ①育てたい生徒像に必要な資質・能力について、生徒の実態から伸ばすべき資質・能力を選定する。
 - ②選定した資質・能力の中から各教科の特性に合わせて、育てたい資質・能力を決定する。
 - ③各教科で決定した資質・能力を育成するための新たに追加すべき目標・内容を検討する。また、教科横断的に資質・能力を育成する場面として、実社会に対応した課題設定をした総合的な学習の時間を充てる。
 - ④9年間を見通し、発達の段階を考慮してスパイラルな学びになるように、指導の順序の変更、指導学年の変更が必要な内容を検討する。
 - ⑤各教科の指導内容等から必要な授業時数を設定した学年ごとの時間数を整理する。
 - ⑥選定した資質・能力の育成につながるカリキュラムになっているのか検討し、必要に応じて③～⑤を繰り返す。
- なお、②③に関しては、「縦のつながり」として学年間の系統性と「横のつながり」として教科間の整合性の2つの視点で学習内容を検討していく。

特に学習内容の整理については、学年のつながり(縦)と教科間のつながり(横)の両面で検討することで学習内容の重複について整理でき、学習内容をスリム化できることは明らかであるが、何度も繰り返し学びながら深めていく、スパイラルな学びも重要である。例えば国語科において、説明文や物語文は各学年で学ぶ学習内容であるが、他の学年で学んだから次の学年では学ばないということはない。つまり発達の段階に合わせた学びを明確にさせていく必要がある。

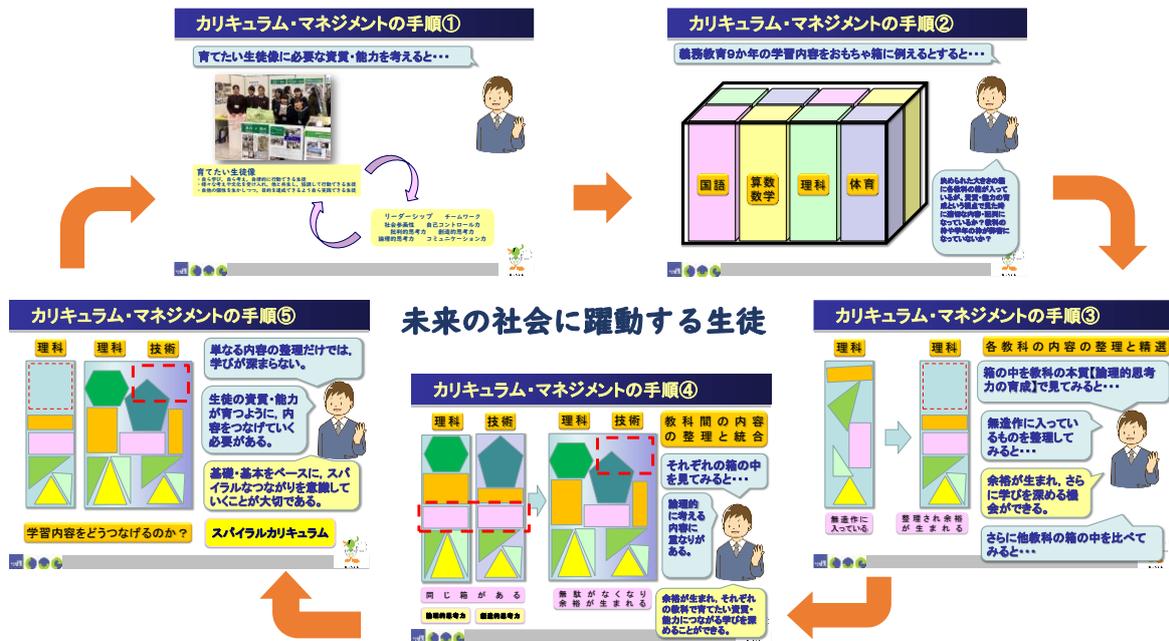


図3 カリキュラム・マネジメントの手順

どんな内容を繰り返し学び、その学びの上に何を付加していくのか、さらに教科として育てたい資質・能力に必要な内容なのか、その点を明らかにしてカリキュラム・マネジメントを行う必要がある。つまり単なる学習内容の整理ではなく、学習内容のつながりを意識したスパイラルカリキュラムを構築していく必要がある。そのためには「どのような生徒を育てたいのか」というしっかりとした生徒像を持ち、そこに向けたカリキュラムの構築が必要であると考える。

このカリキュラム構築の中で重要となるのは、学校として「どのような生徒を育てたいのか」という明確な生徒像である。そして育てたい生徒像に「必要な資質・能力は何か」、さらにその資質・能力を「各教科でどのように育てるのか【教科の本質】」、について学校として意思統一をしていく必要があると考える。

(イ) 主体的な学びを促す教材・授業モデル「考えるプロセス」の開発

学習課題や事物・事象と向き合う「着眼の場面」、課題を解決していく「分析の場面」、課題解決の過程を振り返り活きた知識・技能として自分のものにしていく「一般化の場面」の3つの場面からなる授業(単元)構成を取

り入れた「考えるプロセス(図4)」に基づいた学びを行えば、課題解決に必要な見方・考え方を把握し、見方・考え方を働かせた探究活動を行い、一連の過程を振り返る中で、仲間と協働的に活動したり、新たな価値を創造したりする機会を生徒に与えることができるのではないかと考える。

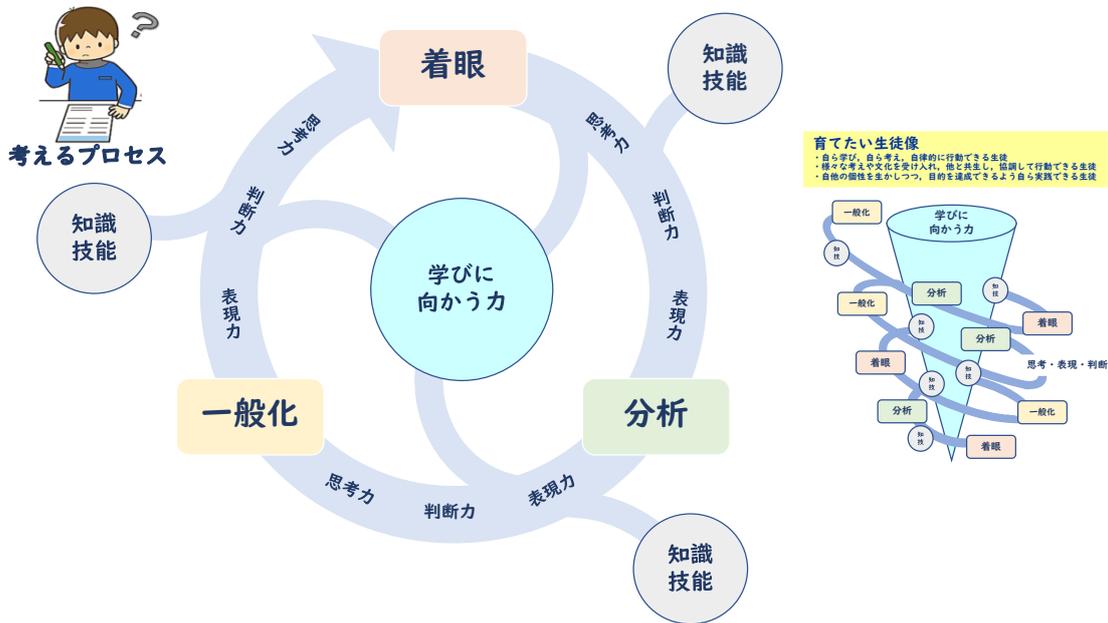


図4 「考えるプロセス」

授業モデルについて、本校では、児童生徒の科学的思考力の育成をねらい、平成21年度より、第5学年から第9学年まで、英国の科学教育の考え方や、その教育プログラム”Thinking Science”のノウハウを取り入れ、理科の標準授業時数を拡充して図5のように「考えるプロセス」を重視した教育を実施してきた。そして各教科において、「思考力・判断力・表現力」の育成に成果を挙げている「考えるプロセス」を活用し、「学びに向かう

表2「各教科の見方・考え方一覧」

教科	見方・考え方
国語「言葉による見方・考え方」	言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童(生徒)が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。
社会「社会的な見方・考え方」	
・社会的な事象の見方・考え方	社会的な事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること。
・社会的な事象の地理的な見方・考え方	社会的な事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること。
・社会的な事象の歴史的な見方・考え方	社会的な事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差違などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること。
・現代社会の見方・考え方	社会的な事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点(概念や理論など)に着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること。
算数・数学「数学的な見方・考え方」	事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、論理的、統合的・発展的に考えること。
理科「理科の見方・考え方」	「エネルギー」を柱とする領域 主として量的・関係的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。 「粒子」を柱とする領域 主として質的・実体的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。 「生命」を柱とする領域 主として多様性と共通性の視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。 「地球」を柱とする領域 主として時間的・空間的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。
生活「身近な生活に関わる見方・考え方」	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする。
音楽「音楽的な見方・考え方」	音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。
図画工作・美術「造形的な見方・考え方」	感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自己のイメージをもちながら自分としての意味や価値をつくりだすこと。
家庭「生活の営みに係る見方・考え方」	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること。
技術「技術の見方・考え方」	生活や社会における事象を、技術との関わりで捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等に着目して技術を最適化すること。
体育・保健体育「体育の見方・考え方」	運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること。
「保健の見方・考え方」	個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。
外国語活動・外国語「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。
道徳「道徳科における見方・考え方」	様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで(広い視野から)多面的・多角的に捉え、自己の(人間としての)生き方について考えること。
総合的な学習の時間「探究的な見方・考え方」	各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという総合的な学習の時間の特徴に応じた見方・考え方のこと。

力・人間性」「生きて働く知識・技能」を育てるための授業モデルの開発を進める。この「考えるプロセス」は、表2

に示す各教科の「見方・考え方」を土台とした「深い学び」へ向かう上で有効であることが、昨年度から取り組んでいる本校の研究の成果から示されている。

したがって、他の資質・能力の育成に関しても「考えるプロセス」が有効であると推察でき、「見方・考え方」をはたらかせた「深い学び」の実現のため、本校がこれまで取り組んできた研究「考えるプロセス」を活かした一貫性のある授業モデルの開発ができると考えている。そして、学習課題や事物・事象と向き合う「着眼の場面」、課題を解決していく「分析の場面」、課題解決の過程を振り返り活かした知識・技能として自分のものにしていく「一般化の場面」の3つの場面からなる授業構成を考えた。

この授業構成は、1つの授業時間内だけでなく、単元全体を通して構成されることも想定し、スパイラルに学びが継続し、育てたい資質・能力が高まっていくように学習内容を構成する必要がある。

【着眼の場面】

学習課題や事物・事象に対して、生活経験や知識・技能をもとに、さまざまな文脈に合わせて、表2に示す各教科の特性に応じた「見方・考え方」をはたらかせて学習課題や事物・事象と向き合う。このときに「見方・考え方」に対する認知的な葛藤が生じることで、課題解決に向かう意欲が高まると考えられる。

【分析の場面】

学習課題や事物・事象を解決するために、さまざまな文脈に合わせて、各教科の特性に応じた新たな「見方・考え方」をはたらかせて学習課題や事物・事象を解決していく。このときに仲間と協力したり、話し合ったり、議論したりする主体的で協働的な活動を通して、課題解決に向けて学びが深まっていくと考えられる。

【一般化の場面】

課題解決の過程を友だちに説明したり、自分自身で振り返ったりすることで、自分自身の学びの変容をメタ認知することができる。この場面によって、新しい知識や経験が生きた知識・技能として習得されていくと考えられる。

この3つの場面が1時間の授業の中に構成される場合や1つの単元の中で構成される場合など、学習課題や事物・事象の内容や子どもの発達の段階に応じて構成が変わることが考えられる。また、学習の中で提示する課題や事物・事象がとても重要であり、どのような「見方・考え方」をはたらかせて課題解決に向かっていくのかをはっきりとさせていく必要がある。

(ウ) 各教科で育てた資質・能力を活かす場の設定

算数・数学や英語のような積み上げの教科においては義務教育9年間の学習内容を単に前倒しにしたり、発展的な内容を取り入れたりするのではなく、児童生徒の発達の段階を考慮し、基礎・基本の定着を図るため、じっくりと丁寧に厚みを持たせて学ぶ単元と、そうでない単元を精選するなどの検討を行う。また、社会科や理科のような領域ごとの学びを行う教科においては、児童生徒の発達の段階を考慮し、義務教育9年間で単元を入れ替えたり、統合したりしてより効率的・効果的となるような検討を行い、さらに、技術・家庭や保健体育のような、他教科の基礎の学びの上に新たな学びを深めていく教科については、図6のように他教科との学びの繋がりを考慮し、学習時期の調整や学習内容の関連性を明確にし、教科を超えた横の繋がりを強化することを検討するなど、教科等の特性に応じた検討を行うこととした。そして、教科横断的な学習活動が各教科で育てられた資質・能力を結び付けていく重要な活動であり、義務教育9か年を貫く1つの柱とする必要があると考えた。

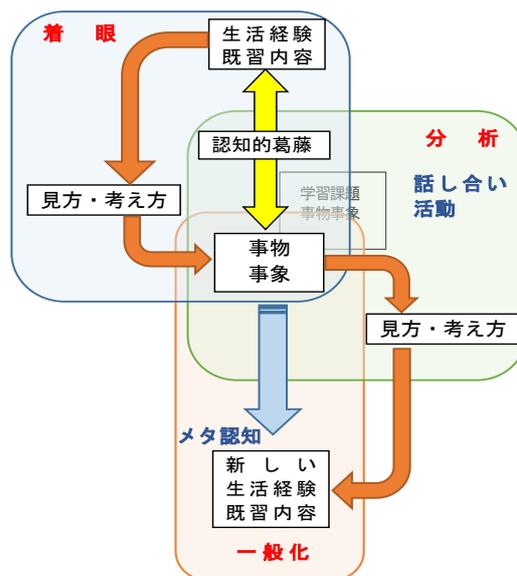


図5 本校が提案する「深い学び」



図6 教科横断的な実践

そこで、図7のように生活科や総合的な学習をスパイラルな教科横断的な学びの柱とし、義務教育前期課程（小学校段階）では様々な事象への経験を重視するために、STEM教育を取り入れて京都市内に数多くある博物館を活用し、その中で本校が育てたい資質・能力を活かす場として総合的な学習の時間を位置づけたいと考える。その上で、義務教育9か年の総合的な学習の時間の系統性な学びを考慮し、今日的な課題や解決困難な課題などの課題解決を通して、各教科で育てた資質・能力をさらに高めていきたいと考える。

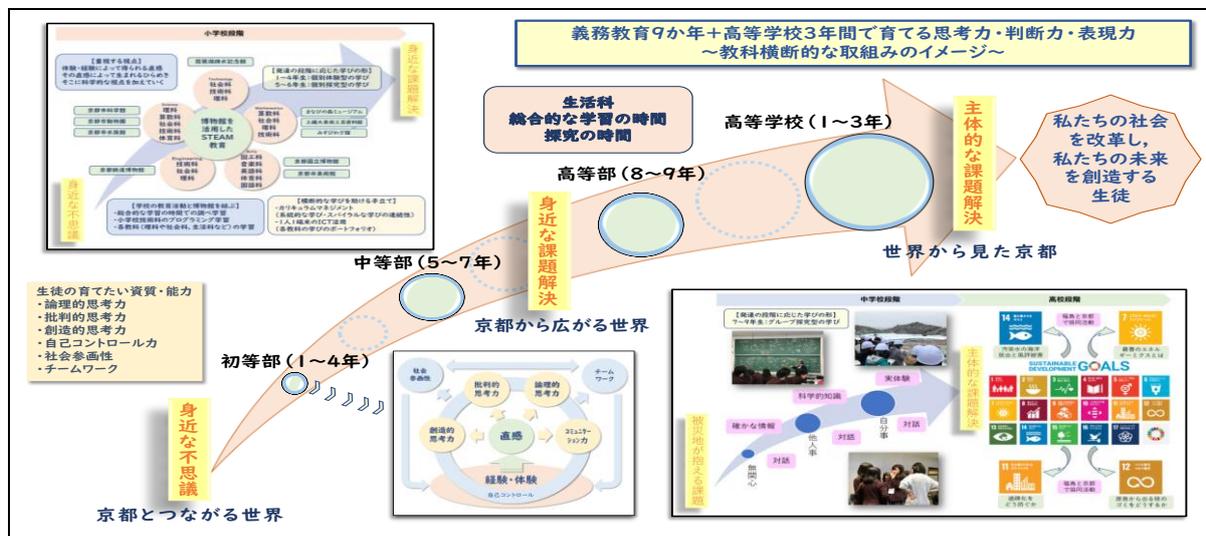


図7 生活科や総合的な学習を教科横断的な学び

(2) 教育課程の特例

(ア) 外国語科(英語)を第1学年から実施

- ・外国語科(英語)の年間授業時数を、第1学年で68時間、第2~4学年で70時間を設定する。
- ・生活科の年間授業時間を第1学年で34時間減、第2学年で年間35時間減とし、減じた時間を外国語科(英語)の授業時数に充当する。
- ・外国語活動の時間は実施せず、外国語科(英語)の授業に移行する。
- ・外国語科(英語)の授業として、第1学年で年間34時間、第2~6学年で年間35時間は、朝の時間に週3日15分間の英語モジュール学習を実施する。

(イ) 各教科・領域で育てた資質・能力を活かす場として、生活科と総合的な学習の時間における9年間の系統的な繋がりを持たせた新たな学習内容を設定

- ・第5・6学年理科の授業時数は年間10時間増、第7学年の授業時間数を年間20時間増とする。

(ウ) 技術・家庭科を第3学年から実施

- ・第3学年より、家庭科の学習内容を発達の段階に応じて実施するとともに、食育とプログラミング学習を柱とした新たな学習内容を設定する。
- ・第3学年から第6学年の各教科(国語・算数・社会・理科)のプログラミングに関する学習内容を技術科の学習する内容として再編する。
- ・技術科(情報領域)を第3・4学年で年間18時間、第5学年で年間35時間、第6学年で年間30時間を設定し、学びの連続性と発展性を高めるために、第7・8学年で年間10時間増とする。
- ・家庭科の授業時数として、第3、4学年で年間17時間設定し、第5学年で年間20時間減の40時間、第6学年で年間14時間減の41時間とし、第3学年から第6学年の4年間で学習内容が網羅できるようにする。

(エ) 理科と技術科の学習内容の整理と系統性の強化

- ・第8学年理科の物理分野と第8学年技術科の電気分野の学習内容を整理し、第8学年理科10時間減とし第8学年技術科10時間増とする。

(オ) 第6・7学年社会科の学習内容の系統性の強化

- ・第6・7学年の歴史分野を2年間で学習できるように学習内容を整理し、第7学年の授業時数を年間15時間減とする。

(3) 研究開発にあたり配慮した事項・問題点

①配慮した事項

- ・各教科の学習内容の整理のために、月1回の教科部会の時間を設定した。また、連携協力の先生方から各教科が指導を受ける機会を多く設けた。
- ・教師の力量、授業力、研究力などを向上するため、定期的かつ計画的に研修会を設けた。
- ・学校として育てたい生徒像を全体で共有できるように、学年ごとに発達の段階に応じた姿を意識するように、授業指導案のレイアウトを一新した。

②問題点

- ・本年度は各教科で取り組むことに重点を置いたことにより、全体での統一感が薄くなり、教科によっては、自己調整学習や見方・考え方に傾いた研究となり、全体での共有が難しくなった。
- ・義務教育9か年という発達の段階が大きく異なる生徒たちの成長をどう見取るのかということがとても難しい。

5 研究開発の結果及びその分析

各教科において育てたい資質・能力が育ち、それを活かすことができれば、学びに向かう力が高まるという考えのもと、主体的な学びに関わる表3のアンケートを全生徒(約850名)に対し毎年行った。このアンケート結果を基に指標分析を行ったところ、下記のような結果が得られた。

表3 主体的な学びのアンケート

番号	質問内容
1	学校の学習内容を理解する自信がある。
2	学校の学習に取り組んでいく自信がある。
3	学校の学習は、得意なほうだと思う。
4	学校で知識を多く身につけることは大切だと思う。
5	解決するのが難しい出来事について、今まで知らなかったことが、わかるようになるのは楽しいと思う。
6	テレビやインターネット等で流れている情報について、学校の知識をもとに、一度、考え直してみることは大事なことだと思う。
7	解決するのが難しい出来事に関して、いろいろな疑問をもつことはおもしろいと思う。
8	解決するのが難しい出来事について、自分のふだんの生活に結びつけてみることは大事なことだと思う。
9	解決するのが難しい問題について、実際に確かめて、事実を知ることは楽しいと思う。
10	解決するのが難しい出来事について知ると、ふだんの生活の役に立つことが多いと思う。
11	解決するのが難しい問題について、いろいろと自分で詳しく調べてみたいと思う。
12	解決するのが難しい出来事について知った事実は、人に伝えることが重要だと思う。
13	解決するのが難しい問題について、実際に確かめて、いろいろと考えを深めることが楽しいと思う。
14	解決するのが難しい問題について、自分の言葉で説明できることが大切だと思う。
15	ある教科の知識や考え方を、他の教科の学習でも、積極的に活用したいと思う。
16	学校で学んだことは、物事が正しいか、誤っているかを判断するときに役に立つと思う。
17	学校で学んだ知識や考え方をもとに、人と意見交換をするのが楽しいと思う。
18	解決するのが難しい出来事について、実験で確かめてみることは、大事なことだと思う。
19	解決するのが難しい問題について、その証拠を考えながら、話し合うのがおもしろいと思う。
20	学校で学んだ知識をもとに、自分の周りのことについて、正しいか誤っているか、考えることは大切だと思う。

まず、年度ごとの各指標の学年比較を行うと、図8のように、年度に関係なく学年が上がるにしたがって各指標の値が下がっていく傾向にあることがわかる。これは一般的に言われる「ませてる」ためではないかと考えられる。しかしながら、2019年度から次第に傾斜が緩やかになるとともに、全体的な指標の値が高くなっていることがわかる。コロナ禍で生徒の学びが危惧される中、本校の取り組みの中ではそのような心配は見られない。それどころか、主体的な学びの指標が高まる傾向にあり、本校の研究の成果が示されているものと考えられる。

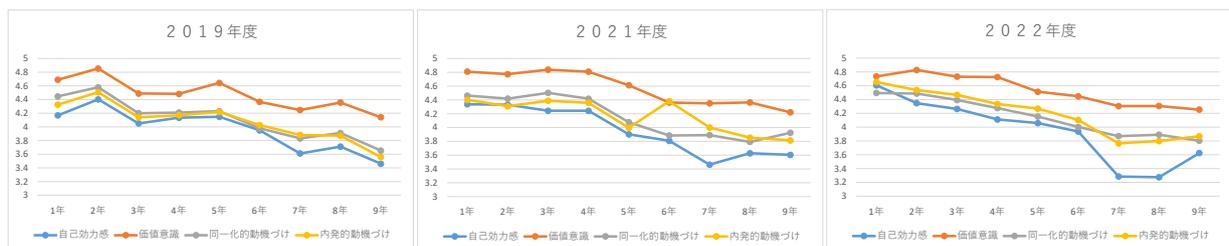


図8 主体的な学びに関わる指標の年度ごとの学年比較

次に、各指標について分析すると、図9のように、価値意識、同一化動機づけ、内発的動機づけについては、年

度ごとの傾向に差はなく、高い値を維持している。また、学年ごとの急激な変化も見られない。しかしながら、自己効力感については、他の3項目よりも低い値となっている。これは、本校の研究の中で学習や活動に対する生徒自身のメタ認知を大切に行っていることにより、「自分はまだできるはず」「思ったよりうまくできなかった」など、生徒自身のメタ認知がしっかりと行われている裏返しではないかと考えられる。また、第6学年から第7学年においてどの年度でも値が急激に下がっていることから、第7学年より本格的に定期テストが始まり、その先の入試が生徒の視界に入ってくることから、さらに値の低下が見られるのではないかと考えられる。

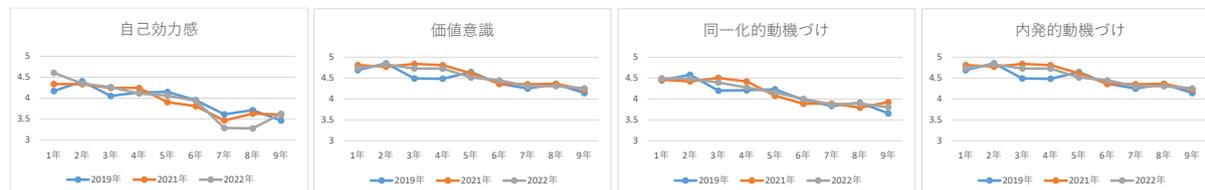


図9 主体的な学びに関わる指標の指標ごとの学年比較

さらに、各学年について経年分析を行うと、図10のように、第7学年を除いて、どの学年も各項目が下がることなく、高い値で維持されていることがわかる。しかし、第7学年について、2022年度の自己効力感と内発的動機づけの値が急激に下がっている。これは教員側の指導が大きく影響していると考えられる。本校の研究を理解することができず、教え込みの授業と生徒の活動に制限を加える学級経営を行い続ける教員がいるためと考えられる。このことから、教員の指導法や学級経営が子どもたちの育ちに大きく影響を与えることを示していると考えられる。

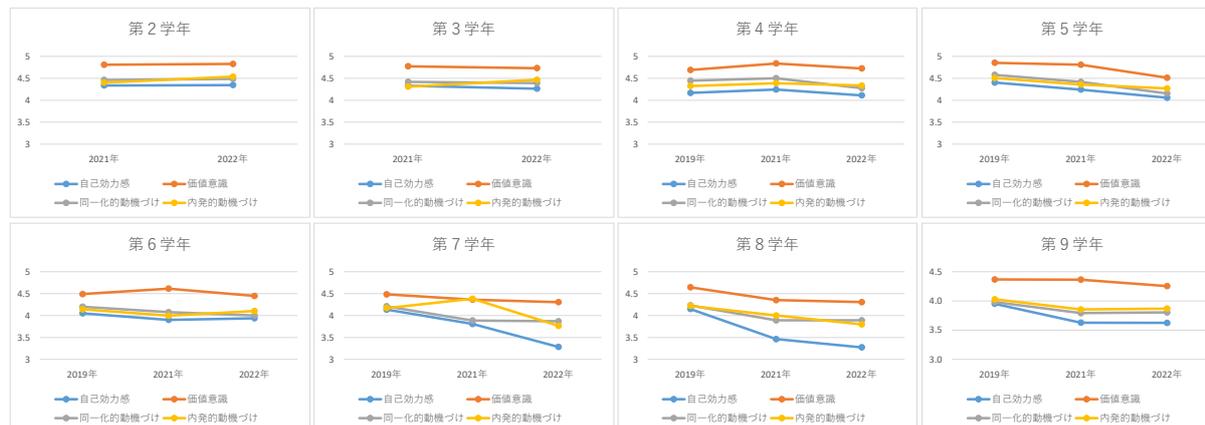


図10 主体的な学びに関わる指標の学年ごとの経年変化

6 今後の研究開発の方向性

各教科と総合的な学習の時間を行き来するなかで、学習内容や育てたい資質・能力をならしていくことが重要であることがわかった。このため、来年度は総合的な学習の時間を各教科で育てた資質・能力を活かす場として、総合的な学習について系統的なカリキュラムをこれまで以上に洗練された形で構築していく。

さらに、総合的な学習の時間の中での学習活動を通して各教科の学習内容と各教科の資質・能力を再確認し、各教科で育てたい資質・能力を再検討するというスパイラルで長期的な視野で研究を進めていく。

京都教育大学附属京都小中学校
教育課程表（令和4年度）

区分	各教科の授業時数											道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数	
	国語	社会	算数／数学	理科	生活	音楽	図画工作	美術	技術・家庭	体育／保健体育	外国語 英語						
前期課程	第1学年	306		136		68 (-34)	68	68			102	68 モジュール 34 (+68)	34		34	実数850 モジュール (+34) 884	
	第2学年	315		175		70 (-35)	70	70			105	70 モジュール 35 (+70)	35		35	実数910 モジュール (+35) 945	
	第3学年	235 (-10)	65 (-5)	165 (-10)	80 (-10)			60	60		35 技術18 家庭17 (+35)	105	70 モジュール 35 (+70)	35 0 (-35)	70	35	実数980 モジュール (+35) 1,015
	第4学年	235 (-10)	85 (-5)	165 (-10)	95 (-10)			60	60		35 技術18 家庭17 (+35)	105	70 モジュール 35 (+70)	35 0 (-35)	70	35	実数1015 モジュール (+35) 1,050
	第5学年	175	100	175	105 サイエンス 10を含む			50	50		75 技術20 家庭40 (+15)	90	80 モジュール 35 (+10)		80 (+10)	35	実数1015 モジュール (+35) 1,050
	第6学年	175	105	175	105 サイエンス 10を含む			50	50		70 技術10 家庭41 (+15)	90	80 モジュール 35 (+10)		80 (+10)	35	実数1015 モジュール (+35) 1,050
後期課程	第7学年	125 (-15)	90 (-15)	140	105			45		45	80 技術30 家庭25 (+10)	105	140	35	70 (+20)	35	1,015 (11)
	第8学年	140	105	105	130 (-10)			35		35	80 技術40 家庭25 (+10)	105	140	35	70	35	1,015 (11)
	第9学年	105	140	140	140			35		35	35 技術17 家庭18	105	140	35	70	35	1,015 (11)
合計	1811 (-35)	690 (-25)	1376 (-20)	760 (-30)	138 (-69)	473 (11)	358 (11)	115 (11)	410 (+120)	912 (11)	858 (+278)	314 (11)	0 (-70)	510 (+40)	314 (11)	9,039 (+209)	
前期課程計	1441 (-20)	355 (-10)	991 (-20)	385 (-20)	138 (-69)	358 (11)	358 (11)	115 (11)	215 (+100)	597 (11)	438 (+278)	209 (11)	0 (-70)	300 (+20)	209 (11)	5994 (+209)	
後期課程計	370 (-15)	335 (-15)	385 (11)	375 (-10)	115 (11)	115 (11)	115 (11)	195 (+20)	315 (11)	420 (11)	105 (11)	0 (11)	210 (+20)	105 (11)	3045 (11)		

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名 京都教育大学附属京都小中学校

校長名 湯川 夏子

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 〒603-8163 京都市北区小山南大野町1番地

電話 (075)431-7131

Fax (075)431-7133

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数（令和4年12月1日現在）

（前期課程）

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
96	3	95	3	95	3	94	3	95	3	95	3	570	18
児童数		学級数		児童数		学級数		児童数		学級数		児童数	学級数
3		1		6		1		4		1		13	3

※ 上段普通学級 下段特別支援学級

（後期課程）

第1学年		第2学年		第3学年		計		前後期合計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
86	3	91	3	93	3	270	9	840	27
6	1	6	1	6	1	18	3	31	6

※ 上段普通学級 下段特別支援学級

4 教職員数（令和4年12月1日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1※	2	0	2	0	47※	0	2	0	1	20※
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計	※校長は、本学教授が兼務している。 ※教諭は、短時間再雇用2名及び臨時的雇用5名を含む。 ※講師及びALTは、非常勤講師の数を記載。 ※スクールカウンセラーは、本学から派遣されている非常勤職員の数を記載。					
4※	1※	2	0	82						

5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成15～17年度 研究開発学校指定

平成18～20年度 研究開発学校指定(延長)

平成19～21年度 調査研究学校指定

平成30～令和4年度 研究開発学校指定

(2) その他

平成24～25年度 教育課程研究指定校(思考力・判断力・表現力) [国立教育政策研究所]